

秋の彼岸によせて

平成三十年九月 大乘寺 長老 岡 光俊

この「秋の彼岸によせて」を書くために、今年の春の彼岸の書きだしを見て驚きました。「今年の一月、二月は、京都市内でもマイナス四度の日が数日続く異常気象となり、水道水凍結による水道管損傷により、その後の生活に大きな影響がでた地域も多いと聞いております。」と異常気象だったのだと改めて思い起こした次第です。酷暑、いや地獄の暑さという意味で酷暑と表現されるかたもおられますが、まさに熱中症で命を落とされるかたがこれ程多くなると、酷暑の表現そのものの様相であったといえましょう。それに加え、豪雨、地震、巨大台風襲来と、日本全国、癒える間もなく次々と天災が襲ってきている昨今です。

また自然の生態系にも大きな異変が起きているといわれています。蜜蜂の減少は、今後の地球規模の生態系異変に大きく関わると分析する学者も現れています。生態系はどんな小さな生き物でも、死滅すると一気に全生命体が死に向かうことになります。豪雨の元になる雲の生成も、近年、宇宙からのエネルギーが大きく起因しているという学者も現れてきました。地球温暖化のメカニズム、オゾン層の破壊によるものと同じ原因ということになります。皆さまのなかにも地球の異変に危機感をお持ちのかたも多いと思います。

人はこの地球に喜んで頂けることをなにかしてきてきたでしょうか。人類の歴史は、戦争の繰り返し、我がぶつかり合い。家庭にあっても、職場にあっても、個人にあっても。

地球の繊細な営みを感じ取れない横柄な人間の今日までの行動。戦争に勝つための原子爆弾、水素爆弾の限らない実験と使用。どこから見ても、地球にとって人類の存在は大きな負の存在でしかないということなのです。

今の状況を変えるためになにができるのでしょうか。争いをなくすることから初めてみませんか。我が振り回し、我が通したい、独り善

がりの考えである自分を改めないで和は生まれません。個人個人の心が和にならなければ、もはや、この繊細な地球に人類は自らが居場所を失うこととなるでしょう。ほかになにかを求めるのではなく、自分の考えを一人一人改める時期と感じます。自然に耳を傾け、地球に問いかけ、人間以外のすべての生きとし生けるものに見習い、自然に添い、地球に身を置かせて頂いていることを深く感謝し我を出さず、そのような生きかたを今日からでも実行することで、それぞれ皆さまがなにかに気づかせて頂けると想います。

彼岸とは、今まで考えたこともなく、気づこうともしなかった我の岸から、気づきの岸へと向かうこと、即ち、小さな我の世界から宇宙の成り立ち、地球のことに目を向け、一人一人が地球に身を置かせて頂いていることに、深い感謝を持ち、自然に頭を垂れる心を皆が持てること、彼の岸に向かうというものです。三千年前からお釋迦さまが訴え続けて下さっていた意味が、今皆さまにやっと届けられたのではないでしょうか。

平成の時代を終えようとするこの時期に、我々人類への、宇宙からの問いかけに、ご先祖さま共々、お釋迦さまの教えをゆつくり紐解き、この危機を乗り越える方法が示されている佛の智慧を解決の糸口を見いださねばならぬときと想わせて頂いております。ご先祖さまへの思いは、我が身を救う鍵、我のみの心で、周りも己も救われる筈はなし。子孫の幸せは、ご先祖さまが握っておられると説かれています。

秋の彼岸、子孫共々の墓参の大切さ尊さを体験して頂きますようお願い申し上げます、ご参拝お待ち申し上げます。